

第 65 回八王子市民大会 **少年部 6 年生決勝戦レポート** 八王子サッカー協会技術委員会

日時：11月27日（日）13時13分 キックオフ

会場：富士森競技場

$$\text{大和田SC} \quad 2 \left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ 1-0 \end{array} \right\} 0 \quad \text{高尾SC}$$

65回を迎えた八王子市民大会少年部6年生の決勝戦は、共に予選リーグから無失点を続ける高尾SCと大和田SCが対戦した。大和田SCは昨年に続く連覇を目指す戦いとなった。穏やかな日差しの中、富士森競技場の天然芝のピッチで、両チームの選手の素晴らしい攻防が展開された。

両チームともフォーメーションは3-3-1だが、大和田は3-1-3となる時間帯が多く、より攻撃的なフォーメーションであった。高尾はトップの10番にボールを当て、そこにMFの17番、13番、7番が絡んでくる。一方大和田は、トップの26番が左右に大きく流れ、右サイドの長身の56番や、左サイドの50番とのコンビネーションでサイドを崩そうとしていた。トップの動きにそれぞれのチームの狙いが現れており、戦術的にも興味深い試合であった。

最初の5分間は両チームともシュートが打てず、両者がががっぷり四つに組んだ立ち上がりとなった。6分、高尾のトップの10番が右に流れてゴール側を向きクロスをあげ、こぼれてきたクリアボールを右サイドの17番が思い切りよくミドルシュートを打った。このシュートは枠をとらえていたが、大和田GKの28番が鋭く反応し、右へとはじいた。このプレーから試合が動き始め、30秒後には大和田が右サイドを突破し、低いクロスをあげた。そのクリアが小さく浮いてしまった所に長身の56番がヘディングでシュートを放つが、高尾GK1番の正面であった。そして9分、ついに均衡が破れる。中盤のボールの奪い合いで大和田の左サイド50番がハーフウェイラインを超えた所で中央の40番にパス。40番は相手をかまし、ゴールまで30mはあろうかという所から鋭く右足を振り抜き、ゴールの左隅にミドルシュートを決めた。このシュートは抑えのきいた低い弾道で、高尾GK1番も右へ飛んだがその指先をかすめて決まった素晴らしいシュートであった。

その後は大和田が押し気味の試合展開が続いた。大和田は3バックのラインコントロールも統率が取れており、高尾を押し込むと左サイドのキャプテン25番、センターの30番、右サイド長身の20番の3人がハーフウェイラインまで素早くラインを押し上げて行く。この押し上げに高尾の複数の選手が取り残され、何度かオフサイドになっていた。16分には大和田トップの26番が右へ大きく流れ、ボールを受けた後に高尾DFのスライディングをかかわして速いクロスをあげた。そこに左から切り込んで来た50番が右足のボレーで合わせようとしたが、高尾DFが粘り強く体を寄せ、何とかそのシュートを防いだ。攻守共に集中した見応えのある素晴らしいプレーであった。

後半の立ち上がりも大和田の攻勢が続いた。大和田右サイドバックの長身の20番が思い切りよくドリブルで上がって行き、そのままシュートを放つ。このシュートはしっかりと枠をとらえていたが、高尾GK1番が鋭く反応しCKにのがれた。1分には右サイドの56番がトップの26番とワンツーで突破し、シュートを放つがこれは枠の右にはずれた。高尾も反撃する。2分、右サイドの17番がなめらかなフェイントで相手をかかわして中央へパス、これを10番が丁寧に落とした所にMFの13番が走りこみシュートを放つが、大和田GK28番に止められる。これは高尾の特徴の出た良いプレーであったが、流れは変えられない。3分には再び大和田の素早いラインの押し上げに、高尾の選手が取り残

されオフサイドとなる… しかし高尾はあきらめない。4分には右サイドバックの19番が右サイドを上がり、さらに中へと切れ込んできて自らシュートを放った。このシュートは惜しくもGK正面であったが、積極的なオーバーラップからの素晴らしいプレーであった。さらに8分にはこの19番が再び押し上げて行き、大和田陣地の中央やや左よりの所からこぼれてきたボールを思い切りよくミドルシュートを放った。このシュートは、大和田GKも反応できず見送ったが、惜しくもゴール右ポストにはじき返されてしまった。ここで同点に追いついていれば、試合の流れも変わったであろう。高尾にとっては本当に惜しいプレーであった。

追加点を奪おうと大和田の攻勢は続く。12分、右サイドバックの20番が力強いドリブルでハーフウェイラインを超えていく。これを高尾22番が素晴らしいスライディングで止める。14分、今度は大和田左サイドバックの25番が高尾の右サイド奥まで攻めあがっていく。立て続けにDFが相手陣地に攻め上がっていく大和田の攻撃は迫力があつた。この試合では、高尾の両サイドバック（左14番、右19番）も前半から何度かオーバーラップを試みており、こうしたプレーは両チームの戦術意識の高さを示していた。DFの選手が攻撃参加することを制限しない両チームの指導者に感謝したい。そしてついに試合が動く。17分、大和田右サイドバックの20番が何と、高尾右サイドのペナルティエリア内までピッチを斜めに切り裂いてドリブルで突進する。それを追っていた22番がたまたま足を引っかけたしまい、大和田にPKが与えられた。18分にこれを20番が冷静にゴール右上に決め、試合を決定づける2点目が入った。しかし高尾はあきらめず、終了間際には立て続けにCKを獲得し得点を狙っていたが、遂に終了のホイッスルが鳴り、この瞬間に大和田SCの連覇が決まった。

<技術委員会からのコメント>

試合を振り返ると、両チームともDFの選手に攻撃参加の意欲が高く、前線の選手も守備に戻るなど、全員で攻撃・守備をしようとする意識の高い試合であった。優勝した大和田の選手、最後まであきらめずに戦った高尾の選手に大きな拍手を送りたいと思うが、皆さんのジュニアユース年代でのさらなる飛躍を期待し、技術委員会からアドバイスを送りたい。

具体的なアドバイスの前提として、身体的に完成してくるユース年代（16歳以上）で素晴らしいサッカー選手となるために、ジュニア年代（12歳まで）で身に付けておくべきことを整理する。

(1) 両足でのボールコントロール技術（パワーはまだ付いていないので、精度の追求）

- ・意図の有るファーストタッチ技術（いつも足元にびたと止めることが良いわけではない）
- ・各種のキック技術（インサイド、インステップ、インフロント、アウトサイド、身体全体を使った大きなキックと、膝下の小さな振りによる素早いキックの両方を意識すると良い）
- ・各種のドリブル技術（最低でも両足のインサイドフックとアウトサイドフック、足の裏を使う技術は身に付けて欲しい）
- ・ボールを保持する技術（肩・腕・腰・膝等、身体を上手に使い相手にボールを奪われない技術）

(2) 個人レベルでの戦術

- ・攻撃の優先順位

① シュートが狙える時はシュート優先（攻撃の目的は、ゴールを奪うこと！）

↓

② シュートが無理ならば、相手DFラインの裏へのパス

↓

③ 裏へのパスが無理ならば、前線の味方へのくさびパス

↓

④ くさびパスも無理ならば、横パスやバックパス

・守備の優先順位

- ① インターセプト（守備の目的は、相手のボールを奪うこと！）
ただし、やたらに突っ込んではいけない。その判断力を磨こう
↓
- ② 相手のファーストタッチのミスを狙う
↓
- ③ ①と②で相手のボールを奪えなかったら、味方のゴールをさらさないために
相手を振り向かせない
↓
- ④ 相手に振り向かれてしまったら、ディレイをしながらゴールから遠ざけていく

・攻守の両局面における「視野の確保」（ピッチ全体を意識して観る！）

- ・マークの3原則
- | | | | | |
|----|---|-----|-------------------------|------------------|
| 位 | 置 | ： | 相手とゴールを結んだライン上 | |
| 距 | 離 | ： | 相手にパスが来た時にインターセプトの狙える距離 | |
| 身体 | | の向き | ： | 相手とボールの両方が視野にいれる |

チームによっては、ジュニア年代でさらにグループ戦術まで練習に取り入れているところはあるだろう。しかし、上にまとめた個人レベルの戦術をしっかりとし身に付けた上で、グループ戦術やチーム戦術に進んでいかなくては、ユース年代で基本の身に付いていない選手となりかねない。指導者の皆さんにはこの点をくれぐれも勘違いしないように指導していただきたい。

以上のことを前提として、両チームの皆さんにアドバイスを3点送らせていただく。

1 ボールをもっと大切にしよう

相手にボールを大きく蹴りこまれ、自分のゴールに向かってボールを追って処理する際に、簡単にボールを蹴り出す場面が何度か見られた。相手が背後に迫っているのならば、このプレーも仕方が無いが、フリーな状態なのにもかかわらず前を向こうとしなかったのである。決勝戦でこのようなプレーが複数回出てしまったことは非常に残念であった。

このプレーの背景としては「GKを含めた味方がフリーであることを伝えていない」ということもあるだろう。しかし基本はその選手自身が「視野を確保していない」ことが原因と思われる。自陣へ戻りながらも背後を振り向き、相手から奪ったボールはできる限り味方の攻撃につなげていこう。（もし指導者が「少しでも危険と感じたら蹴り出しておけ」と指示していたとすれば、チーム内の上級指導者と協議し修正していただきたい。）

2 1対1の攻防を繰り返し練習しよう

両チームとも積極的な攻撃を仕掛けていたので、いろいろな局面で素晴らしい1対1の攻防が見られた。高尾左サイドの14番は、大和田右サイドの長身の56番と対峙したが、相当な身長差があったにもかかわらず、まったく気後れすることなく何度も56番の突破を防ぎ、ヨーロッパの長身選手の中で戦うインテルの長友選手を思い起こさせた。ジュニア年代ではこうした1対1の攻防を繰り返し練習し、局面でのさまざまなスキルを磨いていって欲しい。

優勝した大和田SCは、試合中に何度かDFラインが一気にハーフウェイラインまで上がるオフサイドトラップを仕掛けた。この試合では高尾SCの前線の選手が対応しきれず、有効であったが、この戦術は年代やレベルが上がると通用しない。前線の選手はボールを追わず、ぽっかりと空いたスペースに中盤の選手が飛び出していくからである。保護者の方には

懐かしいであろうが、この戦術は 1980 年代後半にセリエ A の AC ミランがアリゴ・サッキ監督の下で行って世界の頂点を極めたもので、1990 年代に世界的に流行した。しかしその後 FIFA がオフサイドルールを変更し、オフサイドポジションに居るだけではオフサイドにならなくなって以降、衰退した。現在では世界のトップレベルや J リーグでこの戦術を行うチームは存在しない。確かに試合の流れの中で DF ラインを押し上げ、中盤をコンパクトにすることは良く行われる。しかしそれは中盤を厚くすることが目的であり、相手をオフサイドにすることを目的にしているわけではないのである。

繰り返すが、ジュニア年代ではいろいろな局面でいろいろなタイプの相手と 1 対 1 の攻防を経験することが非常に大切である。このことは指導者の方にも是非意識していただきたい。

3 ピッチを広く使おう／もっと広い視野を確保しよう

この試合では、前後半ともにフィールドプレイヤーの 14 人が、ピッチの 1/8 のスペースに固まってしまう場面がたびたび見られた。(保護者の方にビデオを撮ってもらっていたら是非見てほしい。) せっかく 8 人制サッカーで、一人ひとりのスペースを広く確保できるのに、だんごサッカーに近い状況が多く見られ、中盤で逆サイドを使おうとする選手が少なかった。

ある程度相手を押し込んだら、逆のスペースを意識してほしい。混戦の中での攻防も貴重な経験ではあるが、そこで逆サイドへの展開ができればよりチャンスが広がり、スピードに乗った状況での 1 対 1 が経験できるであろう。ボールばかりを観るのではなく、ピッチ全体を頭の中にイメージしておき、広い視野を確保しておこう。

以上のアドバイスを参考にして今後の練習や試合に臨んでいただきたい。皆さんがジュニアユース年代でさらに大きく成長してくれることを期待している。